

## ヨハネの手紙第二 「真理にある喜び」

### 1A 真理にある愛 1-6

1B 選ばれた婦人と子どもたち 1-3

2B 御父の命令としての愛 4-6

### 2A キリストの教えにとどまる者 7-13

1B 教えを携えない者 7-11

1C 反キリストたちの出現 7-8

2C 家への受け入れ 9-11

2B 直接話す喜び 12-13

## 本文

ヨハネの手紙第二を見ていきます。ヨハネの第一が、キリストについての神の命令を、じっくりと教えた手紙であるのに対して、第二と第三の手紙は、その命令について、具体的な教会への具体的な指針です。第二の手紙は、真理のうちに歩んでいない偽教師たちを、交わりの中に入れてはいけないという注意について、ヨハネは書いています。第三の手紙は、真理のうちに歩んでいる兄弟たちを、しっかりと受け入れなさいという勧めです。どちらも、家の教会の所有者、管理をしている人にヨハネが語っていると考えられます。

### 1A 真理にある愛 1-6

1B 選ばれた婦人と子どもたち 1-3

<sup>1</sup> 長老から、選ばれた婦人とその子どもたちへ。私はあなたがたを本当に愛しています。私だけでなく、真理を知っている人々はみな、愛しています。<sup>2</sup> 真理は私たちのうちにとどまり、いつまでも私たちとともにあるからです。

「長老」というのは、ヨハネ自身のことです。年齢的にもヨハネは年老いていますが、十二使徒の中で唯一、生き残っている教会の指導者であり、神から霊的に権威が与えられているということで、自分のことを長老と呼んでいます。

そして、「選ばれた婦人とその子どもたちへ」というのが、この手紙の受け手です。婦人と言っていますが、家の教会において、その家の住人であろうと考えられます。夫がいても、集会の切り盛りは、彼女がやっているのでしょう。そして、「その子どもたち」というのは、その教会に集っている信者たちのことです。

第二の手紙、また第三の手紙を理解するために、また、他の、使徒たちの手紙を理解するため

に、当時の教会の背景を知る必要があります。教会というのは、主に家々で行われていました。また、ユダヤ教の会堂でも行われていたことが、ヤコブの手紙を見ると分かります。要は、教会堂というような、キリスト教のための建物はなかったのです。ローマ時代、キリスト教は、公認されておらず、時に迫害や圧迫を受けてきた少数派でした。それで、集会となると、比較的大きな家で集まっていたのです。

そして、教会の指導体制も、今より流動的でした。長老や監督は一つの家の教会に、複数いたと思われる。いや、一人だとしても、いつでも他の人が監督できる体制が整っていたと思われる。そして、頻繁に巡回している説教者がいました。福音を語る伝道者、預言を行う預言者、また使徒たちがいました。教師も巡回していました。今、このような体制を似通ったかたちで行っているのは、中国です。中国の家の教会は、指導する牧者は一人でも、他の人が担当できるような体制がありますし、またその人も、他の教会にも巡回するようなことが多いです。私たちも、時々、ゲストスピーカーを招きますね。また他の教会で私が奉仕をしていれば、他の教会の牧師さんが説教してくれることもあります。

ですから、そのような働き手の行き来が多く、またキリスト教の教えが、信条のようにして確立しているわけではない時です。その時にどのようにして、集会が行われている家を管理している人々が判断して、行動すべきか？ということが問われるのです。

そして、このような状況で、大勢、イエス・キリストが肉体をもって来られたことを否定する者たちが現れて、頻繁に家にやって来るという状況が、ヨハネが手紙を書いている背景です。第一の手紙では、教会の中に深く浸透していた様子をヨハネは書いていました。教会の中で、仲間だと思っていた者たちが出て行ったことを書いています。かなり深刻な事態です。ここでは、そういった人々が頻繁に来る状況です。それで、その家の所有者である婦人に語りかけています。

まず、「選ばれた婦人」と言っていますね。主に愛され、選ばれているのだということを、端的に言い表しています。神の選びを知ることはとても大事です。パウロも、不法の人、反キリストの現れによって、多くの人が惑わされることを述べた後で、テサロニケ第二ですが、こう述べています。「2:13 しかし、主に愛されている兄弟たち。私たちはあなたがたのことに、いつも神に感謝しなければなりません。神が、御霊による聖別と、真理に対する信仰によって、あなたがたを初穂として救いに選ばれたからです。」このようにして、救いに選ばれている人々は、御霊による聖別されています。そして、真理に対する信仰があります。

そして、ヨハネは「私はあなたがたを本当に愛しています。私だけでなく、真理を知っている人々はみな、愛しています。」と言っています。2 節で、「私たち」と言っているのは、主イエスが選ばれた使徒たちのこと、またその使徒たちの教えを堅く守っている人々のことだと考えられます。彼ら

には、真理はいつもとどまっています。というか、主が御霊によって、真理をいつも留まらせているようにさせておられるのが、すべての信者の特徴です。「 Iヨハ 2:20 あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。」とヨハネは教えていました。

それだからこそ、本当に愛することができるのです。真理が与えられているからこそ、そこに神の命令である、互いに愛し合いなさいという命令を守ることができています。イエス・キリストの真理に根ざしているからこそ、キリストの愛が満ち溢れます。逆に言えば、真理から離れては、真実な愛は生まれて来ません。人間的な愛は、どんなに努力しても、反キリストの霊に呑み込まれてしまいます。終わりの日、獣は、神や天にあるものを冒瀆する、罵ると、黙示録 13 章に書かれています。真理に基づくので、初めて本当に愛せるのです。

<sup>3</sup> 父なる神と、その御父の子イエス・キリストから、恵みとあわれみと平安が、真理と愛のうちに、私たちとともにありますように。

手紙の挨拶ですが、使徒パウロも、使徒ペテロも、手紙において、父なる神とキリストからの恵みと平安をもって書き始めています。ここでの特徴は、「あわれみ」の恵みと平安の間に挟まれていることです。パウロが、テモテへの手紙とテスへの手紙で、同じことをしました。すなわち、指導的な奉仕をしている人々に対して、憐れみを加えているのです。主の憐れみがなければ、奉仕をすることができないことを痛切に知っているからです。

そして、ここでは「真理と愛のうちに」と、ヨハネが強調しています。真理のうちにいること、それで初めて愛があります。

## 2B 御父の命令としての愛 4-6

<sup>4</sup> 御父から私たちが受けた命令のとおり、真理のうちに歩んでいる人たちが、あなたの子もたちの中にいるのを知って、私は大いに喜んでます。

長老として、信仰における父として、次世代の人たちが、真理のうちに歩んでいることほど、うれしいことはありません。これまでの労苦がどれほど大きかろうと、真理のうちに歩んでいるのを見たならば、すべて報われた思いになります。パウロが、テサロニケにいる新しい信者が、苦しみの中でも信仰に堅く立っているのを知って、慰めを得ました。「 Iテサ 3:7-8 こういうわけで、兄弟たち。私たちはあらゆる苦悩と苦難のうちにありながら、あなたがたのことでは慰めを受けました。あなたがたの信仰による慰めです。あなたがたが主にあって堅く立っているなら、今、私たちの心は生き返るからです。」

<sup>5</sup> そこで婦人よ、今あなたにお願いします。それは、新しい命令としてあなたに書くのではなく、私た

ちが初めから持っていた命令です。私たちは互いに愛し合しましょう。

長老のヨハネがお願いしています。神の命令なのですが、長老とて強制できません。神の命令は、その人が自ら進んで、それを守るからこそ意味のあるものだからです。そして、その命令は、第一の手紙でもヨハネが語っていたことです。互いに愛し合うこと、です。これは、初めから持っていた命令であり、イエスが弟子たちに、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」というものです(ヨハネ 13:34)。

<sup>6</sup> 私たちが御父の命令にしたがって歩むこと、それが愛です。あなたがたが初めから聞いているように、愛のうちに歩むこと、それが命令です。

命令にしたがって歩むことが、愛によるものであることを強調しています。第一の手紙でもそうでしたし、イエスが弟子たちに、「もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」と言われていました(ヨハネ 14:15)。愛によるのではなく、命令を守ることは意味がないし、逆に命令を守らない愛というのも、偽りです。愛は、ただ言葉だけのもの、あるいは感情だけのものではありません。

そして強調しているのは、「愛のうちに歩むこと、それが命令です」ということです。パウロが、コリント第一 13 章で、愛がいかにキリスト者にとって至上のものであるかを説きました。異言も、知識も、奇跡も、犠牲も愛がなければ無に等しいです。そして、愛と希望と信仰がいつまでも残りますが、その中でももっともすぐれているのは愛です。

こうして、真理の中に歩んでいることをヨハネは喜ぶと同時に、愛のうちに歩むことをお願いしています。あいさつで、「真理と愛のうちに(2 節)」と言っているように、です。真理のうちに歩んでいて、愛のうちに歩まないこともあり得ないし、愛だけで、真理のうちに歩んでいないということも、ありえません。どちらもあって、初めて、神をみこころを行っていると言えます。

パウロも、エペソ人への手紙で、キリストのからだ、教会が建て上げられるのは、愛のうちに真理を語ることによってであることを教えています。「エペ 4:14-15 こうして、私たちはもはや子どもではなく、人の悪巧みや人を欺く悪賢い策略から出た、どんな教えの風にも、吹き回されたり、もてあそばれたりすることがなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において、かしらであるキリストに向かって成長するのです。」ヨハネもこれから、人の悪くみ、悪賢い策略、そして教えの風について語っていきます。その中で大事なものは、愛をもって真理を語ることだと言っています。真理のうちに歩み、そして愛のうちに歩みます。この二つがあって、初めて教会がキリストの身丈にまで成長するのです。

## 2A キリストの教えにとどまる者 7-13

### 1B 教えを携えない者 7-11

#### 1C 反キリストたちの出現 7-8

<sup>7</sup> こう命じるのは、人を惑わす者たち、イエス・キリストが人となって来られたことを告白しない者たちが、大勢世に出て来たからです。こういう者は惑わす者であり、反キリストです。

第一の手紙で、ヨハネが詳しく話しました、反キリストについてです。具体的に、この婦人の教会にも、いろんな者たちが入ろうとしているのが分かります。「2:18 幼子たち、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であると分かります。」終わりの時には、世界の救世主のようにして現れますが、世界に荒廃をもたらす人物が現れます。神の聖所に入り、自分が神であると宣言します。そして、神と天に住む者たちを冒涇します。そして、聖徒たちを滅ぼし、偽預言者がその人物の像を造り、それを全住民に拝ませます。キリストの現れの前に、世界を惑わして、偽物を信じるようにさせるのです。

しかし、テサロニケ第二 2 章によると、その不法の秘密はすでに働いているとされています。それが、ヨハネ第一では「反キリストの霊」と呼ばれます。「Iヨハ 4:3 イエスを告白しない霊はみな、神からのものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていましたが、今すでに世に来ているのです。」2 章 18 節にある、「今や多くの反キリスト」というのは、反キリストの霊に動かされている偽預言者、偽教師たちのことです。

ここ 7 節で、「イエス・キリストが人となって来られたことを告白しない」とありますが、神であられるイエスが、人となった、肉体を取られたところを否定します。肉体を取られていたのに、それでも神であり独り子であることが、この方の証しです。しかし、これら惑わす者たちは、このことを告白しないということです。

<sup>8</sup> 気をつけて、私たちが労して得たものを失わないように、むしろ豊かな報いを受けられるようにしなさい。

「私たちが労して得たものを失わないように」というのは、ヨハネたち、使徒たちが労していたのは、イエスの名によって、永遠のいのちを持っていることです。しかし、それを失うということは、永遠のいのちを持たないということです。どんなに正当化しようが、イエスが肉をもってこの世にあらわれてくださったということ、神が人となられたということを否定するならば、そのイエスは、すでに本物のイエスではないということです。

イエスの名を唱えながら、天の御国に入れられないことなど、あるのか？と聞かれたら、はい、と答

えます。イエス様が、偽預言者に気をつけなさいと言われた時に、こう言われました。「マタ 7:21-23 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』」そして、イエスを信じている者は、御国を豊かに受け継ぐこととなります。

聖書の解釈には、いろいろなものがあります。そして、その解釈の違いというものは、許容されるものが多いです。けれども、聖書にはこれは惑わしである、偽りであると断言しているものがあります。それに抵触すれば、やはり救われません。その大きな一つが、御子を信じていないということです。ここで大事なことは、イエスと言っても、聖書に啓示されているイエスなのか？ということです。イエスの名を唱えているだけではなく、そのイエスが、聖書で証しされている方なのか？ということです。

#### 2C 家への受け入れ 9-11

<sup>9</sup> だれでも、「先を行って」キリストの教えにとどまらない者は、神を持っていません。その教えにとどまる者こそ、御父も御子も持っています。

午前礼拝で、じっくりとこの部分をお話しました。「先を行って」という訳はとても良いと思います。元々は、「境界を超えて」という意味合いです。越えてはいけないう線を越えて、という意味合いです。そこから、キリストの教えという、越えてはいけないう線を越える者ということになり、先を行っていると訳されています。

「キリストの教え」は、あまりにも単純です。いつも変わりません。しかし、キリストにこそいのちがあり、知恵があり、力があります。知性による知識ではなく、人格的な関係にある知識なのです。しかし、人は人格的な関係をないがしろにして、形だけになっていきがちです。結婚関係が、生きたものではなく、形だけのものになっていってしまうのと同じです。そこで、悔い改めて、初めの行いをしていくのが筋です。エペソにある教会に、イエス様が命じられたように、です。

ところが、反キリスト、偽の教師たちは、これまでの教えが古くなっているのだ。先進的、進歩的になっていかないといけないうのだ、とするのです。そして、グノーシス主義者のように、知識を優先させるのです。そういった教えに、注意してください。今は、ネットでいろいろな情報を得ることができます。キリスト教会で、影響力があると言われている人々から、いやそういった人々からのものが、入り込みやすいです。なぜなら、「この人が言っているのであれば、変なものではないはず。」と思ってしまうからです。あるいは、本人は極端に変なことを言っていないのに、そういったことを

使って、極端になっている人たちもいます。

ところで、「たかが教え」と思うかもしれませんが。けれども、パン種が粉全体を膨らますように、わずかな悪や不正は全体に広がります。横浜港からアメリカのロサンゼルス港に行く船が、その方向が、0.1 度分違っていて、大したことはないと思うかもしれませんが。いいえ、太平洋を渡り、アメリカ大陸に行くまでには、ロサンゼルスの港から何百<sup>キ</sup>も離れたところに到達してしまうのです。

そしてヨハネは、「その教えにとどまる者こそ、御父も御子も持っています」と言っています。教えと、御父と御子との交わりは直結しているのです。その教え自体が、生きた教えであり、交わりのための教えなのです。教えのための教え、知識のための教えではないのです。そういった意味で、パウロは、牧者であるテモテに次のように指導しました。「 I テモ 4:16 自分自身にも、教えることにも、よく気をつけなさい。働きをあくまでも続けなさい。そうすれば、自分自身と、あなたの教えを聞く人たちとを、救うことになるのです。」<sup>10</sup> 惑わしからの救い、信仰の逸脱からの救い、不法や罪の誘惑からの救いです。

<sup>10</sup> あなたがたのところに来る人で、この教えを携えていない者は、家に受け入れてはいけません。あいさつのことばをかけてもいけません。<sup>11</sup> そういう人にあいさつすれば、その悪い行いをともにすることになります。

この手紙の背景を冒頭でお話ししましたが、家とは、人々が集まっている教会でもあります。ですから、自分の個人の家にエホバの証人の人が来た時に、あいさつもしないという意味ではありません。そうではなく、同じ兄弟だとかいい、教会で教えさせてほしいとか言っているような働き人が、使徒たちの伝えるキリストの教えを携えていない人であれば、あいさつもしていけない、ということでもあります。

今の教会の状況でいうならば、ゲストスピーカーとして招いてほしいと私に行ってきて、私が精査することなくやみくもに、受け入れるような場合です。そんなことをしてはいけない、ということですから。事実、教会には異端も含めて自分たちのイベントに参加するように促す宣伝広告チラシが入ってきます。また、私と議論したいということで、長文の印刷された紙の束を置いてきた人もいます。いろいろな人がいるけれども、すべてを吟味することなく受け入れてはいけないということです。

ここで大事なものは、交わりと宣教の違いです。神はすべての人を愛し、御子をくださいました。ですから、今、偽りの教えに陥っている人がいて、その人たちに主から重荷が与えられて、それで付き合い始めるといのは、とても良いことです。エホバの証人たち、また他の異端の人たちと付き合い合っ、それでキリストを証しする人たちもいます。その時は、当然、あいさつもするのです。

しかし、交わりの中には決して入れていけないのです。交わりとは、同じものを共有することです。私たちは間もなく、キリストのからだに血に共にあずかります。一つになることです。そのような交わりに入るようなことを絶対にしてはいけないということです。あたかも同じ兄弟であるかのように、一つであるかのように見えるようなかたちで受け入れてはいけないということです。

反キリストたちは、キリスト教会のことばを乗っ取ります。受け入れないと「愛がない」と非難する人たちがいます。「キリストの教えと言っているけれども、こちらが本当の正しい教え」であるとか、私に説得しようとした人もいます。「若者たちに届いていないですね。こうやったらいいですよ。」と、私を呼び出して説得しようとした人もいます。こうやって私たちが、素直にキリストに拠り頼んでいるところを責めます。私たちは神の恵みによって救われているし、恵みによって立っています。ですから、私たちが、ああだこうだと言われたら、欠点に思えるようなことを言われたら、その通りなのです。しかし、彼らは、最もしてはいけないことをしようとしています。神の恵みによって救われていること、ただキリストの愛に留まっているところから引き離そうとしているのです。

「悪い行いをともにする」とヨハネは言っています。自分自身が悪いことをしている主体ではありません。けれども、その人がしていることに、自分がキリストの名で関わるのであれば、悪い行いをともにしていることとなります。ある人が悪いことをしているのを知りながら、それに関わり、しかもキリストの名を使って関わっていくのであれば、それは直接、その悪を行っているのと同じです。パウロは、「あらゆる形の悪から離れなさい。」と言いました( I テサ 5:22)。

## 2B 直接話す喜び 12-13

<sup>12</sup> あなたがたにはたくさん書くべきことがあります。紙と墨ではしたくありません。私たちの喜びが満ちあふれるために、あなたがたのところに行って、直接話したいと思います。

これは大事なことです。直接話すところにある、喜びです。御子と御父との交わりが、私たちの交わりであると第一の手紙で、ヨハネは言いました。「1:3-4 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。」キリストが肉を取られてこの世に来られたように、私たちも生身の体を持ってきてこそその交わりです。そこに喜びが満ち溢れます。

<sup>13</sup> 選ばれたあなたの姉妹の子どもたちが、あなたによろしくと言っています。

おそらくヨハネは、エペソから、この手紙を出しています。ヨハネのいるところにある教会と、友人関係にある教会なのでしょう。このようにして、教会間にある交わりをあいさつという形で表しています。交わりにある喜びです。そして交わりは、キリストの教えにとどまっているところにあります。